

社会福祉法人

風土記

《56》

東京都

日本初の民間の知的障害児学校を運営する財団法人滝乃川学園（現・社会福祉法人）が都市化による環境悪化のため、西巣鴨村庚申塚（現・東京都豊島区）から、多摩川をのぞむ河岸段丘の一面にある北多摩郡谷保村（現・東京都国立市矢川）に移転してきたのは1928（昭和3）年のことであった。広々とした敷地内（2万3617平方メートル）を立川段丘崖下からの湧水を集めた矢川が流れ、田を潤し、府中用水に注いでいる。

創立者の石井亮一（1867～1937）は、日本聖公会産みの親ウィリアムス主教と出会い、

秘かに決意していました。父兄、学費がある者だけが教育を受けられる幸せものでありません。今まで、一般の女子教育をする人多くいました。孤女の教育に至っては環境を悪用する者はかりでした。孤女一人ひとりに合わせて学びを与え、保母となり、女工となり、産婆となり、看護婦となり、教師、伝道師となつて更にその能力を伸ばし、女性達の先駆者

した。岐阜県全域に甚大な被害を与えた。その孤児救済活動に岡山孤児院の石井十次、大阪博愛社の小橋勝之助と共にあつた。この時、岐阜県に對し明治天皇をはじめ皇室からは御下賜金、御料

る少女孤児の救済にあつたのである。当時、少女孤児の人身売買が問題視され、その解決が急務であった。大地震から2カ月後には、近代日本における国家資格を持つた、最初の女性医師であり女性運動家だった荻野吟子（1851～1913）の協力によって、「荻野医院（上野西黒門町）を仮院舎として「孤女学院」を設立し、岐阜の少女孤児20余人を受け入れることにした。

石井亮一・筆子夫妻の二人三脚

木の提供。一方、済生会、大病院などは多くの医療従事者を派遣、日本赤十字社は創設者・佐野常民らが現地入りした。県内の囚人も支援、復旧に加わつた。

翌年（明治25年）、北豊島郡滝野川村（現・東京都北区）に寄宿舎付きの女子学校「孤女学院」を完成させ、仮院舎から引越す。この時の決意を「孤女学院設立の告白」（概要・資料提供は石井亮一・筆子記念館）館長・米川寛前滝乃川学園常務理事として次のように残している。石井は24歳であつた。



創立者・石井亮一・筆子夫妻

滝乃川学園（上）

リクス主教と出会い、感化を受けキリスト教を信仰することになった。その聖公会が運営する外国人居留地・築地にあつた立教女子学校の教頭時代、1891（明治24）年10月28日に岐阜県本巣郡の根尾谷を震源とした、国内最大級（M8.4）の濃尾大地震が発生

となつて貰いたい。そのため彼女たちの養育、教育のため終生の力を注ぐことが出来れば幸いである。（概略）この決意を持って女子教育を始めた。少女孤児の中に知的障害児（当時、白痴と表現）が1人いることに注目し、知的障害児教育の必要を強く感じました。そして以前から関心を持っていた米国の研究を調べるために、1889（明治22）年に海を渡る

知的障害教育の先駆者



北区滝野川村に設立した孤女学院の園舎



往時の学園正門（門扉は今も取り付けていない）右側には門標
◎石井亮一自筆の門標

龍乃川学園

のである。そこで米国には既に専門の教育をする学校が10校もあることを知り、日本は40年遅れていると痛感して帰国。97（明治30）年「孤女学院」を知的障害児教育施設として、名称を所在地にちなんで「滝乃川学園」と改称。また生徒を広く募集し特殊教育部と、障害のない子どもに障害児の特性を教える保母養育部を設け、教育は本格化していく。近くに陸軍の施設が造られるとあつて1906（明治39）年に隣接する西巣鴨村庚申塚に移転した。

石井筆子のことである。1884（明治17）年に父親が共に旧肥前大村藩（長崎県）の出身だった縁で、鹿島果と結婚し3人の娘を授かった。しかし3人とも障害児で、次女が早世する不幸に見舞われ、続いて夫も36歳の若さで亡くなる。その時、亮一の学園に長女、三女を預けたことから親交が深まり1903（明治36）年に結婚に至つた。

『滝乃川学園百二十年史』編集代表・津曲裕次（大空社、2011年刊）によると、筆子の父、渡辺清は長崎で勝海舟に蘭学を学ぶ。東征軍の参謀として西郷隆盛らと共に戦い、江戸城無血開城の場に列席した人物。明治政府では知事、貴族院議員など歴任する。生涯にわたって筆子を支援したのは、筆子の叔父、渡辺昇で長州の桂小五郎（木戸孝允）の門下となり、坂本龍馬らと薩長同盟の仲介役を果し、のちに政府の要職に就いた。

筆子自身は1872（明治5）年に上京し、日本初の官立（国立）女子学校で現在のお茶の水女子大学付属中学校の源流である「東京女子学校」に入學。同窓生にはのちに滝乃川学園3代理事長になる渋谷栄一（1840～1931）の長女・穂積歌子、共立女子大学創立者のひとり鳩山春子らが出た。筆子は1887（明治10）年、クララ・ホイットニーの「英語・パイブル塾」に通い、キリスト教と出合うのである。

【高野進】

社会福祉法人

風土記

《56》

東京都

石井筆子は1880(明治13)年から2年間、ヨーロッパ(フランス、オランダ、デンマークなど)に留学。そして生涯の盟友の津田梅子(1864~1929)とは、「華族女学校(現・学習院女子中高等科)で教師として肩を並べた。フランス語は筆子が担任で大正皇后も教え子の一人。英語は津田梅子だった。二人は98(明治31)年、日本女性代表として米國で開催された「万国婦人倶楽部大会」に出席し帰国したが、筆子は亮一と結婚するために華族女学校を退職し、校長をしていたミッションスクール静修女学校は、津田梅子に譲ったのである。

その梅子は、女子英学塾を開塾。それが現在の津田塾大学の始まりであり、日本の近代女子教育



戦前の学園全景(谷保村)

一郎。2代は立教大学の同級生で立教女学校校長の小林彦三郎と続くが、いずれも短期であった。そして3代の理事長職には日本近代資本主義の父と言われ、生涯に約500社の企業を設立した渋沢栄

資金難で教育と経営を分離

であった亮一が1937(昭和12)年に逝去すると、推されて2代学園長に就任し、学園経営の難局を乗り越えつつあったが、44(昭和19)年に逝去。しかし、生涯に多くの文書、著作を残し、日本の知的障害者教育、福祉の道を指し示したのであった。

その筆子が31(昭和6)年、学園から「お願い」として送ったと思われる

滝乃川学園(中)

てよいかと途方に暮れてしまうことがあります。教えても教えても進まない。私共は信仰の力なくしてこの努力を果すことは出来ません。この礼拝堂は、日本聖公会のアキム監督より、全くこの目的のために建てられたものです。私共は及ばずながらもできる限りの努力を致して居るのでございます。解説では、署名はないが、これは筆子による文章とみて間違いない。折りとともに困難な事業に立ち向かう学園の職員一同の思いを語って

余すところがない、とし

とところで、1920(大正9)年3月、学園男子寮から出火、寮などが全焼、園生6人が焼死する事件が起きた。火災の後、学園は同年9月、個人経営から財団法人化による経営にかじを切った。資金難の学園を救うために石井亮一・筆子夫妻には教育に当たってもらい、経営自体は理事会が担うことになった。その初代理事長には、亮一の旧制佐賀中学の先輩で海軍軍医総監になる中尾太

一が就く。同時に300を超す社会貢献活動に取り組んだ社会事業家でもある。この職を31(昭和6)年、17歳なるまで続けたのである。その知名度と何よりも行動力によって財政基盤の整備に努めた。その後には、三菱、三井など財閥系が資金援助を申し出たことが、滝乃川学園百二十年史年表からうかがうことができ

そして、34年(昭和9)年10月、この地で石井亮一の呼び掛けで滝乃川学園をはじめとした8施設

渋沢栄一が財政基盤を整備



米川寛館長

によって産声を上げた旧・日本精神薄弱児愛護協会(現・日本知的障害者福祉協会)は、その加入施設が6440に達しましたと、米川寛館長は感慨深げに語った。



旧・財団法人日本精神薄弱児愛護協会創立総会の記念写真(本館前にて) =1934(昭和9)年



本館と同時期の1928(昭和3)年に竣工した聖三一礼拝堂

があつたことが注目される。ここで太平洋戦争下の園生数の推移はどうだったのか。在園者は谷保(現・矢川)に移転後、増加が続き、戦争勃発時には最も多く100人ほどであったが、終戦時の45(昭和20)年以降になると70人と少なくなった。戦争による経済状況の悪化、国民の窮乏などにより、これまでの各方面からの補助金、交付金なども減額され、さらに寄付金も減少の一途をたどるのであった。

この影響はもろに園生に表われた。くにたち郷土文化館刊行の『苦難の日々も』一国立の戦中、戦後をふりかえる(1995年刊)には学園では栄養不足により亡くなる子どもが多く出たとある。学園が刊行した『百二十年史』には、ひもじさに苦しんでいたのは園生だけではない。空襲下の防空壕への園生たちの避難誘導、徒労に終わることも多い買い物(例えば野菜などを近隣の農家に)、夜尿などの多い子の世話など、昼夜を分かたぬ激務も重なり、職員たちも疲れ飢えていたとある。終戦直前、学園男子寮が陸軍の警備隊に接収されたが、45(昭和20)年8月15日終戦となった。日本人だけで310万人が戦死、戦病死。海外でも数多くの民間人を戦禍に巻き込んだ。そして、この時から海外からの復員、民間人の引き揚げ者が約410万を数えたのである。学園の食料不足、物資不足は続くのであった。

【高野進】

社会福祉法人

風土記

《56》

東京都

1947(昭和22)年、日本国憲法施行。前年12月からララ物資(LARA・アジア救援公認団体)の配給が始まり、何とか飢えからは逃れられた。翌48(昭和23)年の児童福祉法施行によって、滝乃川学園は精神薄弱児施設となる。そして、52(昭和27)年、日本が主権を回復した年に、社会福祉法人の認可を取得し、新しい時代に踏み出すことになった。

い児童も対象になっていきたが、48年に児童福祉法によって知的障害を持つ児童を受け入れ、その日常生活の支援とともに、地域生活への移行、自立

さまざまな専門分野の人にサポートしてもらっている。児童支援施設は原則18歳まで。ここから他の成人支援施設に移って行く子どもには、行く先

乾壘子施設長・施設入所支援部長(45)は、「ここへの入所は保護者の方が決めますが、受け入れる私たちは、その人らしく生活してもらおうよ

この成人部の生活介護事業は足浴、散歩、しいたけ販売。森のカフェのお菓子作り、その販売を現在計画中という。とこ

受け成人部を開設する。現在、障害者支援施設として入所支援80人、グループホームなどからの通所支援55人を合わせて135人に対応しているが、重症心身障害者も10人含まれている。乾壘子施設長・施設入所支援部長(45)は、「ここへの入所は保護者の方が決めますが、受け入れる私たちは、その人らしく生活してもらおうよ

で返してくれるんですよ。こちら(スタッフ)の都合ではなく、その人に寄り添って待つてあげれば」。

続けて現在の課題として入所者の高齢化、重症化があると率直に語る。

2002(平成14)年に地域のニーズに添えて第一号のグループホームを開設。現在70人が利用する。永田一彦グループホーム部長(50)は、「このホームで安心して暮らしてもらおうために、入所希望する方の日々の暮らしを思いを、まずご本人、保護者の方から詳しく伺います。その把握が出发点です。その把握が出发点です。その把握が出发点です。」

2003年頃、学園に初めて足を運び、その後、縁あって評議員、理事を務めさせてもらい、この大役を担う決断をいたしました。」

サービスの多様化質の向上を図る

滝乃川学園が創設された当時は、知的障害のな

にに向けての取り組みを続け現在に至っている。

定員30人である。林克昌児童部長(41)は「子どもにとってはここが故郷になりますから、私たちスタッフは、みんなが毎日生き生きと、少しでも幸せに暮らせるように務めています。限界があります。そこで日頃から保健医療関係者、ケースワーカーなど、さま

(施設)で幸せになってもらえるようにして送り出します。そういう子どもから手紙などが来ると本当にうれしいです。この仕事のやりがいを感じます」と、一層優しい顔になって話した。

70(昭和45)年、精神薄弱者更生施設の認可をう心掛けて支援しています。私はこの仕事について20余年になりますが、皆さん感情をストレートに出します。うれしいこと、悲しいこと、怒ること(笑)。それが私は好きです。でも私たちが語り掛けて働き掛ければ、ちゃんと皆さん態度



石井慈典理事長

滝乃川学園 ①

薄弱者更生施設の認可を

どのように関わりを持っているのか。本多公恵施設長・相談支援センター

初めはパーソナルな支援が求められていると考え、ヘルパー派遣事業からスタート。法律がまだ整っていない2000(平成12)年の開始で全

園庭に遊具もあり、車も通りませんから、施設の子どものみならず、地域の子どもも加わってにぎやかです。通所児童の戸外活動が「動」で、臨床心理士による発達検査、個別学習が「静」。動と静を両輪として支援しています。



林克昌部長



乾壘子施設長



本多公恵施設長

被虐待児の緊急入所も



木村隆則常務理事



永田一彦部長

額自己負担でした。児童短期入所は基本的には障害のある児童の支援。近辺の特別支援学校5校に送迎可能な子どもたちが対象になります。虐待などの緊急な場合の受け入れ枠があるので都内全域が対象です。その他に緊急入所事業として国立市、調布市が実施している一時保護もしています。

園庭に遊具もあり、車も通りませんから、施設の子どものみならず、地域の子どもも加わってにぎやかです。通所児童の戸外活動が「動」で、臨床心理士による発達検査、個別学習が「静」。動と静を両輪として支援しています。

昔からさまざまな形で皇室から支援を受けており、木村隆則常務理事・法人本部長(59)は「平成に入ってから先代天皇(上皇)皇后(上皇后)両陛下には即位されてすぐに初の福祉施設として、この学園に行幸啓くださいました。その後も上皇后

さまにはチャリティコンサートに何度も足を運んでいただき、そして今度は退位が決まりました。昨年12月には国内最後の福祉施設への行幸啓としてこの学園に。光栄であり入所者、役員員全ての誇りでもあります」と話した。

「サービスの多様化と質の向上、経営の効率化をはかり、これからも全員で石井亮一・筆子の願い、130年の伝統を大切に、令和の時代にふさわしいサービスを提供させていただきます」と抱負を語る。【高野進】